様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 １７ 日現在

機関番号：３２６８９
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５３７０３７８

研究課題名（和文）未完小説の物語上のテーマの行方―プルーストの忘却と第六巻の分析・編集考察

研究課題名（英文）About Proust's sixth volume - "oubli" and editions

研究代表者
徳田　陽彦（TOKUDA, HARUHIKO）

早稲田大学・政治経済学術院・教授

研究者番号：４０１２６６０２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,500,000円

研究成果の概要（和文）：　マルセル・プルーストの小説『失われた時を求めて』の第六巻『消え去ったアルベルチーヌ』は未完で、作者の死後、出版された。現在、清書原稿、タイプ原稿I,タイプ原稿IIが残っている。1925年に出版された初版は、編集者が介入した痕跡がある。N・モーリアックが1987年に出版した短縮版のタイプ原稿は、プルーストが死ぬ一ヶ月前に行った「アルベルチーヌと忘却」に関する部分を組織的に削除したもので、筆者は、元は、雑誌「レ・ズーヴル・りィーブル」に向けた抜粋であると仮説をたてている。
　第六巻の最大のテーマである「忘却」を無視した編集には問題がある。ただし完璧な編集は不可のであることも事実である。

研究成果の概要（英文）：The sixth volume of Marcel Proust's roman "A la recherche du temps perdu", "Albertine disparue", is unfinished and published after the death of the author. We have the manuscrit, two typed mnuscripts. The first edition published in 1925is coposed by his brother Robert and some editors of NRF. The typed manuscrpt discoverd in 1987 by N.Mauriac is reduced in a third, for Proust, before one month of j\his death, eliminated sytematically the parts concerning "Albertine et oubli", is reduced in a third. I made a hypothesisthat it was at firt an extract destined to the revue "Les OEuvres libres". All edtions which ignored the most important theme of this volume "l'oubli" make problems. But it is true that we will never have a perfect edion.

研究分野：フランス文学

キーワード：プルーストの物語構造　未完成の第六巻　死後出版　アルベルチーヌの捉え方　忘却のテーマ　編集者の思想

１．研究開始当初の背景

マルセル・プルーストの小説『失われた時を求め』の第六巻『消え去ったアルベルチーヌ』が未完成で、作家の死後出版された。

２．研究の目的

1,925 年の初版以来、第六巻は編者により、編者が依拠する資料により、いくつものの版が出版されてきた。とりわけ、1987 年出版の N.モーリアックの短縮版は、この巻の最大のテーマである「アルベルチーヌと忘却」にかんする箇所が作者によって組織的に削除されており、編者のいう「最終版」ではなく、当初は雑誌「レ・ズーヴル・リーブル」あてに作られた抜粋であると筆者の仮説を証明すること。また各編集者が「忘却」のテーマをどう扱ってきたかを検討すること。

N.モーリアックの版は物語上の重要なテーまである 1987 年にN. モーリアックは第 6 巻の新たなタイプ原稿を発見し、物語上の重要なテーマである**「忘却」**の結論とイタリア滞在時のプルーストの**美術思想**が展開される「ヴェネチア滞在」の大部分が欠落するこの原稿を“ 最終・決定稿 ”と主張してて出版したからである。筆者は直後にこの原稿は雑誌に掲載予定していた抜粋であるとの仮説をたてて発表した。今回は物語構造と美術思想の観点から、自説の正当性を証明するための考察を行うとともに作者の意図をいかに尊重し、かつ物語構造とテーマの視点からそれをいかに編集に反映すべきか検討する。

モーリアックの立場を貫けば、物語の一貫性を著しく欠く研究者しか興味を示さない断片群が提示されるだけである。筆者はこの新発見のタイプ原稿が、死の一ヶ月前、病床にあったプルーストが当初、雑誌「レ・ズーヴル・リーブル」*Les Œuvres Libres* に掲載予定していた抜粋であることを確信し、世界ではじめてその仮説を公に発表した一人である。その後も同じ説を唱えている研究者と意見を交換して、貴重な意見を収集してきた。今回はさまざまなレヴェルで自説を証明するためのアプローチを試みて、25,26,27 年度内に、それの直接の証明をする糸口を見出したいと考えている。また Mauriac 版で削除された「ヴェネチア滞在」の章でみられる「忘却」のテーマがいかに物語全体にとって必須のテーマであるかを証明し、またそこで展開されるプルーストのイタリア美術観察がこの章で最大に展開される必然性を物語構造の見地からも再検討し、それらが大部分欠如した Mauriac 版が“ 決定稿 ”でないことを証明する。

フランスでは、Mauriac の仮説を支持する研究者たちと、それを否定もしくはそれに批判的な研究者たちと二分されているが、批判者といえども、氏の主張を正面から批判することはなかなかない。これは、氏の主張の激しさと、氏がプルーストとモーリアックの血筋を引いている事実が一種の権威をともなっている一面もあると思われる。以上のことあっても、フランスでは数人の研究者、日本では、多くの研究者が筆者の仮説を支持してくれている。筆者は、1987 年からすでに、このタイプ原稿は当初「レ・ズーヴル・リーブル」誌にあてた抜粋であるという仮説を日本語の論文で発表した。90 年には、Jean Milly 教授との討論会でこの仮説をフランス語で公表し、91 年にはフランス語論文で主張を明確な形で発表した。フランス国内で、この新資料が“ 抜粋 ”であるという仮説がより公に提出されたのは、イタリア・ローマ大学の Giovanni Macchia 教授が 93 年にフランスで翻訳出版 ”L ’ ange de la nuit ”(Gallimard, 1993) されてからである。以後、「ル・モンド」紙上等でいくつか論争が交わされた。しかし双方とも決定的な論拠を提出できないで今日に至っているのが現状である。筆者はマ

ッキア教授より 4 年早く仮説を発表していたが、残念ながら、日本語で発表していたため、マッキア教授がこの説の代表者となった形で受け止められている。しかし筆者のフランス語論文発表以降、筆者の名は、Robert,Macchia 各教授らとともに、Milly 教授が編集した第 6 巻 *Albertine disaprue*（Champion 刊）で“レ・ズーヴル・リーブル派”と紹介されている。2003 年 9 月京大主催の国際シンポジウムで、この問題を「忘却」のテーマの観点から論じた”L’oubli chez Proust : faudrait-il oublier l’oubli ?”（09 年度中フランスで刊行）、単に“最終校”か“抜粋”かの問題を超えて、「忘却」と「無意志的記憶」がこの第 6 巻でプルーストの思想内で有機的に関係づけられたために、「忘却」が存在しないモーリアック版第 6 巻は物語上不可能であると結論づけた点、パリ第 3 大学の Robert 教授、CNRS の Brun 氏から大いなる賛同を得た。イタリアの Mondori 版翻訳の注釈者の A.B.Anguissola 教授、D.Galateria 助教授は、このタイプ原稿を雑誌「レ・ズーヴル・リーブル」向けの抜粋と注釈で主張している。2004 年 3 月、ローマ大学で筆者の講演の際、両氏は筆者の仮説に興味深く反応し、それを支持してくれた。要するに、筆者の仮説の公的に表明できる賛同者はフランスの一部とイタリア・日本の多くの研究者である。

作者が生前にこの雑誌に掲載した抜粋１編とさらに死後出版された抜粋 1 編と、このタイプ原稿を比較研究する。三つの資料に関し、作者自身による削除方法・編集方法を精細に分析して、方法の類似性を基に筆者の主張を論証する。また 1920 年前後の当時、この雑誌に先行的に抜粋として掲載され、友人の作家の作品の削除・編集方法を研究して、なんらかの共通性を考察する。これらの共通性、形式的類似性、削除方法の類似性から、このタイプ原稿は少なくとも当初抜粋用あったことを証明する。

第 6 巻の主要テーマである「忘却」は、N.Mauriac が出した“最終稿”では、プルーストによって削除されている。「忘却」が『失われた時を求めて』の物語上の骨格ともいうべき「無意志的記憶」と深く結びつき、物語を理解するためには必要不可欠のテーマであり、プルーストが生きてこの巻を出版できたならば、「忘却」のテーマが存在しない第６巻『消え去ったアルベルチーヌ』など想定できないことを論証・提示する。具体的には、プルーストの初期作品から『失われた時を求めて』全体までを検討して、それまでの作者の「忘却」のイメージと、１３年『スワン家のほうへ』出版以後、遅れて導入された「忘却」のテーマがいままでとは異なり、第一巻刊行以後、作品を構成する新たな主要なテーマのひとつになったかということを、フランス国立図書館所蔵の cahiers, carnets を調査して、明確にする。アルベルチーヌ導入と「忘却」のテーマが表裏一体になった創造行為の結果であるという意味で、N.Mauriac 発見のタイプ原稿は、物語構造の視点からも、けっして“最終稿”の名に値しない、単なる雑誌用の抜粋であった事実を証明する。

ヴェネチアにあるサン・マルコ大聖堂、ジオットーのフレスコ画、カルパッチョの一連の絵画を描述する部分は、第５巻までに『失われた時』で展開されたプルーストのイタリア美術観の頂点ともいうべき濃密さがある。ラスキンの『ヴェネチアの石』を手本にこの都市を観察した作者は、師匠の見方とは異なり、それらを美術的観点から叙述するというより、外形のアネクドティックな部分により興味を示した。これはオランダ美術にたいする観照とは見方を異にしている。『スワン』からはじまる、ルネッサンスのキリスト教絵画という“聖”の枠の中に“俗”を見出すほうに専念するプルーストのイタリア美術観が、

この章に結実する事実を明らかにする。大まかに言うと、俗を描くオランダ美術に内面を見て、聖を描くイタリア美術に外面を見る作家の視点を検討する。この視点からしてもまた、『見出された時』での無意志的記憶の結論であるサン・マルコ寺院の洗礼堂にかんする叙述もない、「ヴェネチア滞在」の章が削除されている Mauriac 版の正当さは否定すべきものであると証明する。

従来の版は物語の一貫性の見地から、草稿を再編成してきた。これは一般読者の理解を勘案するとやむを得ない方法である。とはいえ死後出版といえども、編者の独善性は排除すべきである。アルベルチーヌに関する箇所をすべて削除したタイプ原稿を”“決定稿”とする N.Mauriac の主張はほどあまりにも断定的である。「レ・ズーヴル・リーブル」から出版された抜粋二編を詳細に検討すれば、氏の新資料も同じく抜粋用であったという事実が判明されよう。また奇妙なことに、その後いかなる研究者も、「忘却」というテーマが氏の第 6 巻で削除された形で公刊されていても、あまり関心をしめしていない。新プレイヤード判の編者さえ、「忘却」のテーマが削除されているという事実の重大さを指摘していない。それゆえ、筆者の研究は、フランスにおけるプルースト研究で曖昧なかつ無視されている点を鮮明にすることにある。さらに、プルーストが忘却の最終段階をなぜ話者のヴェネチア滞在中の出来事として設定したかという理由を、物語構造・主題論・作者の倫理性という観点からアプローチして、筆者の仮説をより説得的に構築する。筆者の研究が順調にいき、「レ・ズーヴル・リーブル」に関するなんらかの新資料に接することができれば、仮説にとどまらず、筆者の主張は証明されることになるであろう。いままで誰一人、プルーストが第１巻刊行後の『花咲く乙女』に無理やり導入した「忘却」のテーマと『失われた時』の物語上の変貌、第 6 巻での「忘却」の結論と「無意志的記憶」の関係を指摘した研究者はいない。ゆえに自説を新たな資料を収集・検討さらに分析してより明確な形で構築していきたい。またその傍証として、Mauriac が削除した章である「ヴェネチア滞在」が作品『失われた時』全体のなかで、プルーストのイタリア美術への観点が結晶している以上、氏の仮説が成立しないことを証明する。これを証明するのは正当性があると思われる。

３．研究の方法

N．モーリアックの説に反対し、プルーストが雑誌「レ・ズーヴル・リーブル」にわたすべく意図のもとに作成した抜粋であるという仮説をたてた筆者は、重要なテーマである忘却のエピソードをふくむ第 3 章「ヴェネチア滞在」と女主人公アルベルチーヌにかんするページがすべて削除されている事実に焦点をあてる。まず国立図書館で作者が同誌に掲載した同様の二編の抜粋とタイプ原稿の比較検討を削除方法の同一性という観点から行い、同誌に掲載された作者の友人たちの掲載方法も検討する。またプルーストのイタリア絵画の見方の独自性を実際現地に赴き考察して、「ヴェネチア滞在」の章が小説には不可欠であることを証明する。筆者の仮説を支持する研究者に考察をさまざまな形で検討していただき、さらに研究をすすめた。

プルーストは生前（および死後）、この「レズーヴル・リーブル」誌に二度抜粋を掲載した。現在フランス国立図書館には、それら抜粋が所蔵されている。従来からの抜粋研究調査を続行し、件のタイプ原稿と比較検討して、モーリアック版のタイプ原稿が、筆者の仮説どおり、プルーストによる「レ・ズーヴル・リーブル」誌に向けた第 3 の抜

粋であったことを証明したい。その際のプルーストがおこなった、定本に比べての削除および省略方法を詳細に調査する。

さらに、この雑誌は“未発表の完結している小説”を掲載しているという特色を宣伝して幅広く売られていたが、プルーストこの雑誌に掲載する際に、友人のP.Morand やノアイユ夫人たちがすでにその著作を掲載しているのを知って、原稿料の魅力のみならず、なお一層、著作をこの雑誌に掲載する希望・意思をいだいた。それゆえ、ガリマールとの契約に抵触するにもかかわらず、プルーストは抜粋掲載をねがった。だからこそ、友人たちの著作の掲載内容と形式、またプルーストの二篇の抜粋とほぼ同時期に掲載された諸作品の内容形式および種類を考察することによって、この二篇の客観的な性格を認識する必要がある。この作業は、煩雑で成果がどれほどのものであるか、あらかじめ予想がつかないが、国立図書館でこの雑誌のある時期のマイクロフィルムを、徒労となろうとも、できるかぎり調査を続けたい。

また、上記の抜粋研究と並行して、このテーマ研究を遂行するために、すなわち、「忘却」と「無意志的記憶」の連関性を象徴する「心情の間歇」のテーマがどのように形成されていったかを考察した。

４．研究成果

87 年出版された N.モーリアック編集のタイプ原稿『消え去ったアルベルチーヌ』にたいし、筆者は 90 年に“『消え去ったアルベルチーヌ』の問題”と題して、このタイプ原稿は雑誌「レ・ズーヴル・リーブル」あての抜粋であると仮説を葉発表した（世界で最初に発表した）が、日本語論文であったため、フランスでは知られなかった。やっと 91 年にフランス語で同様の趣旨の論文を、かつての指導教授であったミイと対立する形で発表した。93 年にイタリアのマッキア教授の（筆者と同様の仮説が）翻訳本が出版されると、新聞の文化欄を賑わせる問題となった。その後、専門誌でミイ教授とイタリアのアングイソーラ教授の論争までに発展したが、それ以降今日まで、決着はついていない。筆者は 08 年、フランスで出版された本のなかで、モーリアック説を批判した。また 12 年パリ第 3 大学での講演会で「忘却」のテーマの重要性を提示したが、モーリアック説支持の研究者が感想を控えたのは印象的である。フランスではパリ第 3 大学のロベール教授と支持し、重鎮のタディエ氏は「NRF 向けの抜粋」との説を発表している。今回は第六巻の編集問題を「忘却」をめぐって考察した。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　２　件）

1.　<u>徳田陽彦</u>
La mére de Proust et la grand-mère du narrateur — autour du “je” et de la création romanesque,（原文フランス語）早稲田大学教養諸学研究、第 135・136 合併号、p.87-104，2014 年 3 月。（査読なし）

2.　<u>徳田陽彦</u>
Autour du thème de l’oubli chez Proust d’Albertine disparue (La Fifugitive),（原文フランス語）、早稲田大学教養諸学研究、第 138 号、p.69-84，2015 年 3 月。（査読なし）

〔学会発表〕（計　0　件）

〔図書〕（計　0　件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
（TOKUDA, HARUHIKO）徳田陽彦
早稲田大学・政治経済学術院・教授
研究者番号：40126602

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：